

JDS Network News

発行元：一般財団法人日本国際協力センター（JICE）

vol. 26
Mar. 2021



表紙写真：JDS 留学生同士の交流の様子
（2019年撮影）

JDS 帰国留学生がカンボジア司法省長官に就任

- ❖ 日本で学ぶ ～ラオスの持続可能な経済実現を目指して～
（Mr. Khamphilavanh BounEua/東京工業大学工学院/ラオス天然資源環境省）
- ❖ きのがつなく、ブータンと日本

JDS

The Project for
Human Resource Development
Scholarship by Japanese Grant Aid



JDS

BREAKING
NEWS

JDS 帰国留学生がカンボジア司法省長官に就任



H.E. Chin Malin



Secretary of State, Ministry of Justice
名古屋大学大学院 法学研究科 2004年修了

2020年11月、JDS 帰国留学生の Chin Malin 氏がカンボジア司法省長官に就任したというニュースが舞い込んできました。Chin 氏の活躍については、本誌で度々紹介いたしましたが、これまで同省の副長官を務めていた彼の長官就任に、関係者一同からは喜びと期待の声が上がりました。

現在は、司法省長官として法制度・司法制度の政策改革や法律分野の人材育成に携わる同氏ですが、日本留学後15年以上が経過した今でも、留学時に得た専門知識だけではなく、日本で出会った人々から学んだ考え方や姿勢が現在の仕事にも活かされているそうです。

とりわけ親日家である Chin 氏は、2018年4月に、東京・霞が関で開催された「第4回行政官交流会」で放映されたビデオメッセージに登場し、他国の帰国留学生とともに「日本人行政官とのネットワーク構築の重要性」について熱く語りました。

また、2020年1月には我が国外務省の招聘により訪日、茂木外務大臣を表敬訪問するなど、日本とのコミュニケーションにおける重要な場面で、カンボジアの代表として自らが橋渡し役になる機会もありました。

「日本人行政官の皆さんが、公務でカンボジアを訪れる際は、ぜひ私たち JDS 帰国留学生に連絡してください。必ずお力になります。」そう語っていた Chin 氏。親日・知日派行政官として頼もしい“仲間”が、今日もアジア各国で日本との二国間関係を強化すべく、架け橋として活躍できる機会を待ち望んでいます。



2020年1月の訪日時には、茂木外務大臣を表敬訪問
(左列手前より2人目がChin氏。外務省公式ウェブサイトより)

SINCE 1999



Where
Leaders
are made.



JDS The Project for
Human Resource Development
Scholarship by Japanese Grant Aid

日本で学ぶ

カンピラヴァン ブン ウア

Mr. Khamphilavanh BounEua

東京工業大学 工学院 博士課程 2年

ラオス天然資源環境省 気候変動局



将来を見据えたラオス経済の成長シナリオ

低炭素社会シナリオ(LCS)を学ぶ

ラオスでは、2018年度 GDP 成長率が 6.5%を記録し、着々と中間層・富裕層も拡大しています。一方で、車の利用者が急増したことにより温室効果ガスの排出が増加しています。世界中で気候変動問題や地球温暖化対策に注目が集まる中、ラオスも地球環境と経済発展の両立に向けてグリーン・クリーン政策を掲げています。

ラオス天然資源環境省にて、気候変動に関する戦略・政策立案に携わっているブンウアさんは、現在 JDS 留学生として東京工業大学に在学し、「低炭素シナリオ」の研究を進めています。

低炭素シナリオとは、CO₂ の削減と経済成長の両立を実現するにはどうすべきか、10年 20年という長期スパンで将来あるべき経済を構想し、実現に向けて必要な道筋を示すものです。例えば、日本を含め、世界各国では省エネや再生可能エネルギー(太陽光、バイオマス等)の利用を可能にする技術の開発が年々進んでいますが、その技術を生活者、ひいては都市全体まで普及させるにはどうすべきかを考えます。

ブンウアさんが、研究しているのは、その中でも主にラオス交通分野の低炭素シナリオです。例えば、実際にラオスで電気自動車の利用や化石燃料からバイオ燃料への切り替え、炭素課税を推進した場合、どれほどの効果が見込まれるかを分析します。

ブンウアさんと日本のつながり

「ラオスの低炭素社会推進に向けて、日本の優れた技術開発のノウハウを学ぶこと、また、二国間の協力関係強化に繋がる、日本の専門家や関係機関とのネットワークを構築できることも日本留学の魅力です。」と語るブンウアさん。

JDS 留学生として来日する前にも、二国間クレジット制度(JCM)を通じて、すでに日本の環境省、地球環境戦略研究機関(IGES)、海外環境協力センター(OECC)と連携を密にしており、帰国後も日本とのつながりの中で、ラオスの温暖化対策の最前線で活躍していくことが期待されます。

ラオスの持続可能な経済実現を目指して

「日本で得た専門性を生かし、ラオス政府の環境に配慮した成長戦略や政策を前進させたい。『今は経済成長を、環境改善は後で(Grow now, clean up later)』といった姿勢は避けなければなりません。」「自分の知識と専門性で、ラオスが日本のように素晴らしい環境や景観の中で発展するよう尽力することが私の夢です。」真面目で温厚な性格を持つ彼ですが、コメントからはラオスのリーダーとしての強い責任感が感じられます。

帰国後は、温室効果ガスの吸収・排出量の解析に関わる人材育成の支援をしたり、ラオス国立大学の学生に向けた出張講義において自身の専門知識や経験を共有したりすることで、母国の発展に尽力していきたいとのこと。経験や技術を受け継いだ彼の後輩達も、ラオスの持続可能な経済実現に貢献していくことでしょう。

今後ブンウアさんが JDS 帰国留学生として、どんな活躍をするのか、目が離せません。

二国間クレジット制度とは？

二国間クレジット制度 (Joint Crediting Mechanism) は、日本が開発途上国とタッグで温室効果ガスの削減に取り組み、その成果を共有するという制度です。日本は、途上国に炭素削減に有効な技術やノウハウを伝え、各国の炭素削減に協力します。国際的な脱炭素化に向けて、各国で削減すべき温室効果ガスの目標が設けられていますが、協力先の途上国 (例えばラオス) の削減した温室効果ガスの量は、日本の削減目標達成にも活用される、Win-win の制度でもあります。

きのこがつなぐ、 ブータンと日本

低カロリーでヘルシー、食物繊維やビタミン・ミネラル・アミノ酸を豊富に含む万能食材でもある“きのこ”。実はブータンでも、人気の食材です。同国では、需要に対して国内生産量が少ないことや、栽培技術レベルの低さから、国内で食されるきのこの大半をインドからの輸入に頼っていました。同国ではそのような状況を打開すべく、JICA 草の根技術協力事業「ブータン西部キノコ生産農家の生活向上プロジェクト(2016~2019年 実施)」による技術普及を行うなど、国内生産量と技術力の向上に国をあげて取り組んできました。気候や植生が日本と似ていることから、近年では日本の企業がブータンに国外生産拠点を設けるなどの動きも見られます。きのこ農家の減少により、国外に生産の場を求めたい日本と、国産品の生産量と品質を上げて輸出にもつなげたいブータン。この二国間に、きのこがつなぐ架け橋が生まれています。



ブータンのきのこ料理代表、チーズ煮込み「シャモダツィ」。シャモはきのこ、ダツィはチーズを意味する(写真は世界一 Web より <http://sekaichiweb.com/?p=21842>)



ブータン産生松茸の梱包作業
<https://from-food.com/22555/>

JDS 3つの特徴

- 1 **行政官限定事業**
※一部例外がございます
 - 2 **4,662名*1 16カ国*2 の実績**
*1 事業終了国の人数も含む *2 現在の事業実施国数
 - 3 **大臣・局長級を輩出**
- 対象国の社会・経済開発計画の立案・実施に関わる若手行政官が日本で修士号または博士号を取得します。
- 出身省庁…財務・経済、法務、行政、環境、インフラ、教育等
- <事業実施対象国> ※受入人数順
ベトナム、ミャンマー、カンボジア、ラオス、バングラデシュ、フィリピン、ウズベキスタン、モンゴル、キルギス、パキスタン、スリランカ、ネパール、ガーナ、ブータン、東ティモール、タジキスタン
※中国は2012年、インドネシアは2006年に事業終了しました。
- 日本で専門知識を身に着け帰国した留学生は、日本との政策対話に携わる等、様々な場面で活躍しています。**

人材育成奨学計画 (JDS) は無償資金協力による JICA 留学生受入支援事業です。

Editor's Note

JDS Network News (JNN) をお読みいただき、ありがとうございます。本年も JDS 留学生に関するニュースをお届けしてまいりますので、引き続きご愛読いただけましたら幸いです。

昨年は、否応なしに変化を求められた1年でした。当たり前だったことがそうでなくなり、できていたことができなくなる。しばらく経てば、きっとまた元通りの生活ができるのだ、という当初の期待をよそに、ウイルスは私たちに根本的な変化を強く求めたのです。

占星術の世界では、昨年まで約 200 年続いた「土」の時代が終わり、「風」の時代が始まったそうです。追い風ならば大歓迎ですが、向かい風はもう十分…と思ったその時、ある話を思い出しました。「飛行機は離陸滑走時に向かい風に向かって進むことで、より安全かつ効率よく揚力を得て大空に飛び立つことができる。」まさに今、私たちは向かい風の中にいます。だからこそ、この困難を乗り越えた先には、雲の上のように澄んだ青空が待っていると信じて、たとえ心が折れそうになっても、あきらめずに前を向いて進んで行きたいと思います。

JDS 事業に関するご質問がございましたら、お気軽にメールで弊センターまでお問合せください。また、本誌へのご意見・ご感想もお待ちしております。

【お問い合わせ先】

一般財団法人日本国際協力センター (JICE)
留学生事業第一部 留学生事業課 広報担当
E-MAIL: jds.PR@jice.org